
死体殺人の朝

小向遙介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死体殺人の朝

【NZコード】

N5671D

【作者名】

小向遙介

【あらすじ】

人里離れた岬にある別荘に避暑にやってきていた太朗は、恋愛の縊れで彼女を撲殺してしまう。だが翌日、散歩から帰ってきた太朗は、胸に包丁の刺さった彼女の「死体」を目撃する。一体太朗の外出中に何があったのか。死んでいる筈の彼女が再び殺される理由はどこにあるのか。それとも彼女は実は ?

— 昨夜の殺人（前書き）

この作品は、元々は短編にしてさらっと読めるように作ったものだつたのですが、字数が増えすぎてしまったので連載にしました。なので大体三、四話くらいに纏めるつもりです。

一 昨夜の殺人

早瀬太朗は、部屋の薄茶色のカーテンを少し開けた。完全な暗闇だつた空間に鋭い光が射す。眼前に広がる岬の先端に、ちょうど太陽が重なつて見える。夜明けだつた。

彼は清々しい朝の陽射しが自分の罪深さ、後ろ暗さをシリエットのように浮き彫りにしているように感じ、云い様のないだるさもあつて、部屋の中から外界を疎むように睨んだ。そして、岬の先から一直線に眩しい光を投げつけてくる太陽から身を守るように、太朗は一度開けたカーテンを閉め、少し迷つてから部屋の電気を付けた。

あまり、部屋の中の現実を認めたくはなかつた。

太朗は軽く息を吐いてから、無感情な眼差しで部屋を見回した。

隅に置かれた机の上には書きかけのレポートと鉛筆。机上には大量の消しゴムのかすが散らされている。明後日までに書き終えなればならなかつた筈のものだ。本当なら、徹夜であと十枚は埋めるつもりだつた。

皺の多い純白のベッドには、太朗の外出用のリュックサックが無造作に放り投げられている。今日はあと一時間は寝て、それから外出するつもりだつた。

そして、そのベッドの下、木で出来た床に敷かれた鼠色のカーペットにあるもの。

それこそが、太朗が一夜にして背負つこととなつた「犯罪者」の証。

ベッドに寄り掛かるようにして、四肢を投げ出している一人の女性。整つた顔立ちに負けないくらい綺麗な形をした口には、口紅の上から、更に血で化粧が施されている。それと対照的に、肌は剥製のように青白い。目はあらぬ方向を向いており、さながら糸の切れた操り人形のようだつた。

「……涼香」

渴き切つた唇を時々思い出したように舐めながら、太朗は呟いた。

「……お前が、あんなことを云わなければ……」

身体中の水分が削ぎ取られたように干からびた眼差し、干からびた唇、干からびた台詞。最早太朗は正気ではなかつた。ふらふらと備え付けの冷蔵庫の前まで足を運び、コーラのペットボトルを取り出し、酒乱のように豪快に、しかし不気味な程静かにそれを飲み干した。

ワタシ……私……

カジト……カジト

付き合つ……」ことに……

太朗の頭の中で、昨夜の涼香の言葉が再生される。

今まで……

ありがと……

忘れ……ない……

涙を見せながら、涼香はそう云つたのだ。形のいい頬には涙の跡がついていた。でも、そう（……そうだ）、彼女は、笑っていたのだ。それは、太朗には長い間の自分という呪縛から介抱された、満面の笑みにしか見えなかつた（……満面の、笑み）。

俺と付き合つてきたのは、何だつたんだ。

俺は本気だつたんだ。

俺のことを、今までどういう目で見ていたんだ。

俺からずつと逃げたいと思っていたのか。

太朗は、感情の籠つていらない眼差しと言葉で彼女を責めた。そうでもしないと、今まで過ごしてきた涼香との時間が搔き消えてしまうような気がした。最初彼女は戸惑い、次第に慌て始め、必死に弁明

するような口調になつていつた。それらは太朗の耳には言葉として受けとられず、ただ彼女の必死の声音を全身で浴びてことしか出来なかつた。そして、気がつくと太朗は、後ろ手で硝子の小さなテーブルにあつた銀の灰皿を手にしていた。

ガシンッ

ベッドシーツには綺麗な紅の血飛沫が飛んだ。崩れ落ちる涼香。メロドラマでよくやるような、派手な悲鳴は上げなかつた。始終流していた涙は、最後まで途絶えることはなかつた。

だが、太朗は結局気付くことはなかつた。涼香が流し続けていた涙は、最初は太朗を裏切つてしまつたことにに対する悔しさ、申し訳なさによるものだつたのだが、途中から、それを受け入れてもらえない悔しさに変わつていつたことに。だからといって何が変わる訳でもないのだが。

太朗は台所に向かつた。小さな別荘の台所なので、猫の額程の、ついでのような場所だ。ログハウス調なのが唯一の救いだが、機能性に優れている訳でもなく、じてじてとしたアンティーグが散らばつている訳でもない。しまいには巨大な蜘蛛にちよくちよく出くわすような始末だつた。

太朗は黄色のやかんに湯を入れ、沸かす。そして床に置かれた籠から、じそじそとカツプラーメンを取り出した。太朗は昨夜から悲しみ、怒り、狂い、呆然とし、あらゆる感情を凝縮し爆発させたようで、食事のことをすっかり忘れてしまつっていた。相変わらず目は虚ろで空中をさ迷つてゐるが、空腹を感じられるくらいには自我が戻つてきていた。

カツプラーメンに湯を注ぐ。固まつてゐた麺の隙間を埋めるように水位が上がつていく。湯気と一緒に濃い汁の臭いが台所に立ち込めて、太朗の食欲をそそらせた、その時。

突然部屋の方から物音がした。

それまで泥水に浸かり切つたように濁っていた太朗の目は瞬時に鋭くなつた。台所からは直接部屋を見る出来ない。また、この建物には、この小さな台所と、玄関やバスルーム以外には涼香のいるあの部屋しかない。

侵入者だろうか、という考えが太朗の頭をよぎる。実はこの別荘の玄関扉の鍵、昨日太朗が誤つて壊してしまつていた。こんな辺鄙な場所には賊も現れないだろうと思つてその状態のままにしておいたのだが……。

忍び足で台所から顔を出す。薄茶色のカーテンを背景に、勉強机、ベッドと視界に入り、そしてそれに隠れるようにして涼香の頭部と投げ出された左手足が見られた。そしてそれら以外には、何もなかつた（……誰も、いない……）。

今の音は、では、一体　？

太朗は鋭い目付きで部屋の隅から隅までを見回した。机の下にもベッドの下にも、人間一人が隠れられるような空間はない。窓も開いていない。では……侵入者などは初めから入つてきていないということだろうか？　だがそうすると今の物音の正体は　。

そうだ、バスルームはどうだろう。そう太朗は考え、台所と玄関を挟んで反対側のバスルームに向かつた。しかし磨り硝子の扉の前で太朗は奥に潜んでいるかもしれない侵入者に怖くなり、台所から包丁を一本持つてきてから再びバスルームの前に立つた。そして、力任せに扉を横に引いた。がらがら、という硝子戸特有の音がする。

そして　。

そこにもやはり、侵入者の姿は認められなかつた。ただ黒々と湿つた闇が広がつてゐるだけの薄寒い空間である。太朗は刺すような目付きのままで表情は全く変わらなかつたが、内心は安堵の気持ちでいっぱいだつた。　侵入者は、いなかつた。

しかしそうとわかると、同時に別の疑問が頭をもたげてくる。

物音の正体は何だったのか。そして、誰がどのようにして音を発したのか。

そう考えた時（……「誰が」）、太朗は目を見開き、表情を凍らせた。

「誰」がやつたのか。この別荘には、自分と、死んだ（確かに、そう、死んだ筈……）涼香だけしかいない。自分ではあり得ないのだから、音を発したのは……。

「ごめんね

ほんとう

に、

「ごめん……たるうつ……

「ごめん……

涼香は生きている？ そう考えた途端、太朗は昨日の涼香の弁明の台詞の数々が濁流の如く頭に溢れ出していくのを感じた。

たるうつのことば……
すれ……

だつた でも……

目の前が、真っ白になつていった。光は皆同じ色に溶け、太朗の視界に、想いに、その光は入り込んでいった。

二 殺人の代償（前書き）

少し特殊なルビの振り方をしたので、出来る限りパソコンから閲覧することをお薦めします。

二 殺人の代償

太朗は鍵のかからない扉に若干の不安を残しながらも、別荘を出た。外は溢れんばかり太陽光で輝いている。遠くの水平線はぎらぎらと煌めき、遠くに立つ広葉樹も葉に光を受けて生き生きとしている。

今まで外はこんなにも素晴らしい光景になっていたのか、と太朗はぽんやりと思った。

舗装されたコンクリートの道はどこにもない。ただ、別荘から林まで一本の獣道が伸びているだけだ。太朗はその道を歩き出した。太朗は頭の中で、何度も自問する。涼香は生きているのか、死んでいるのか。昨日自分は確かに灰皿で彼女の頭を殴った筈なのだ。そして、彼女は声もなく倒れ、目を見開いてベッドしな垂れかかるようになり、そして、死んだ、……筈。彼女の肌も冷たくなつていたし、そうだ、色だつて。そこまで考えて、太朗は昨日から今日に至るまでの経緯を、もう一度しつかりと思い返すことにした。

早瀬太朗と美武涼香が深い仲になつたのは、今年の春からだつた。そして夏休みとなつた今、避暑でこの太朗の叔父のものだという別荘にやつて来たのだつた。しかし、別荘についた初日の夜、彼女はとんでもないことを云つた。

「私、カジと付き合うことにしたの」

午後八時半。涼香の作つた夕食が終わり、一段落した頃である。突然彼女はなんでもないことのようにそう切り出した。

カジ、とは一人の共通の友人である梶本広志のことだ。

太朗はしばらく何も云えなかつた。時間が止まつたように感じた。そんな太朗の反応は彼女の予想の内だつたらしく、次々と謝りと云い訳の言葉を重ねてくる。

そして、。

実は、太朗は灰皿を手にとつてから朝までの記憶が非常に曖昧で、

その間のことを明確には思い出すことが出来なかつた。だが、どちらにしろ殺した後である。それにどうせただ呆けたように佇んでいただけだろう。そこについては太朗は深く考えなかつた。

しかしやはり、あの時の、涼香を撲殺した時のあの（……あの、鈍い……）感触は、本能的に殺した、と太朗は直感していた。生きている筈がない、とも。

だが現実問題、高々小さな銀の灰皿一枚の一撃なんかで、人は殺せるものなのだろうか。命中したのは頭だつたが、果たしてそれは人の命を奪い去るのに足る威力だつたのか。　そう考え始めると、太朗の頭は最早パニック寸前だつた。

獸道の両側に針葉樹が並ぶ林に入る。木々に囲まれてゐるせいで日光はあまり入つてこないが、自然の作り出す妙な涼しさがあつた。普通は心地よさを感じるものだが、今の太朗には薄寒いものでしかなかつた。

ふらふらと頼りない足取りで、はち切れんばかりの瑞々しい自然に囲まれながら、太朗は道を進んでいく。　と、前方に黒い人影が見えた（……誰だ？）。反対方向から、こちらに向かつてきているらしい。段々その人影は大きくなつてくる。顔を認識出来る程度にその人物に近づいた時、その人物が男性の老人であること、そして右手で白い杖を突いていることがわかつた。　盲目らしい。

彼は太朗の気配を感じ取つたらしく、ぴたりと足を止めて、太朗の方を見た。それに合わせて太朗も足を止める。

「おや、珍しい。こんなちは」

老人は男性にしては高めの声でそう呼び掛けた。目を細めて笑つてゐるが、もしかしたら元々目を閉じてゐるかも知れない。

「……どうも」

突然のことには、何と云えばいいのかわからず、とりあえず太朗はそう返した。しかし、今のこの精神状態で極力人と接したくなかった。出来るだけ手短に済まそうと思った。

「あなたは さうか、あの『家』の人ですか。岬に建つ綺麗な
「……はあ、まあ、そ�ですけど。あなたは？」「こんなところまで、
何をしに？」

太朗としては「殺害現場」の持ち主であることを告白するのは多少
気が引けたが、云わなければ不自然だろうと考へ、多少淀みながら
もそう告げる。 太朗は、この黒の革ジャンを羽織つて白い杖を
突いた小柄な男性を見る。人の良さそうな顔、柔らかそうな白髪。
彼は何者なのだろうか。見当もつかない。

「ああ、毎日の日課なんです。散歩ですよ。私の家から、あの岬まで。
「」は空気が綺麗ですからな、」はしてわざわざ足を運ぶ訳で
す」

「散歩……」

「ん、いやあ、」の田でも案外に歩けるものなんですよ。普通の方
はそうやって思い違いをしておりますがな」

太朗がとつた間をどう勘違いしたか、老人はそう云つた。

「ああ、そうだ。名前を云うのを忘れとりました。私は塚井と申し
ます。これから、毎日ここで会つかもしれません」

「早瀬です。……よろしくお願ひします」

「早瀬……。はて。……もしかして、いや、違つていたら失礼、シ
エフの早瀬敬一氏と関係がありますかな？」

「あつ……叔父です。ご存知でしたか」

「ほお、甥っ子さん。……いやね、料理にはつるさこ方で、『ミカ
エル』にもよく行かせてもらつているんですよ」

ミカエル、とは叔父敬一の経営するレストランの名前だ。

盲目な人が他の感性を存分に發揮するという話はよく耳にするが、
この塚井という老人は味覚にこだわるらしい。

「こんなところで早瀬さんの甥っ子さんに会えるなんて。これも
何かの縁だ、電話番号を渡しておきます、いつか『ミカエル』で会
いましょう」

そう云つてポケットからボールペンとメモを取り出し、くしゃくし

やと自分の電話番号を流し書きして、戸惑う太朗に一方的にそれを渡した。

「では」

そして塚井は去つていこうとしたが、太朗は半ば強引に「待つて下さい」と引き止めた。

「何ですか？」

目を糸のように細めたままきょとんとした表情をする塚井に、太朗は尋ねた。

「失礼ですが、盲目になられたのはいつ頃から？それと、あの岬への散歩が日課になつたのは、いつから？」

大分不自然な云い方になつてしまつたが、切羽詰まつていて太朗はそれどころではなかつた。案の定塚井は訝しげな表情を見せたが、すぐに元の顔に戻り、云つた。

「……ええと、目を悪くしたのは「近く最近」でしてね、確か二年前ぐらいでしたかな。それから、散歩は定年退職した五年前から」

「そうですか。ありがとうございます。では」

それだけ云つて、太朗は頭を小さく下げてそそくさとその場を離れた。塚井は、狐につままれたような表情をしていたが、やがてこつ、こつ、という杖の音と共に歩き出した。

太朗がそれらの質問をしたのは、涼香の死体を発見されるのを恐れてのことだつた。塚井は最初、あの別荘のことを「綺麗な」と形容したのだ。見えていないのにそう云える筈がない。もし塚井が何らかの理由で自らを盲目だと偽つている場合、別荘の異変に気付かれる可能性が高いのだ。まあしかし、盲目になる前からこの散歩コースを毎日辿つていたのなら、不自然な点はない。つまり太朗の不安は杞憂に終わつた訳だが……。

杉やもみに囲まれた獣道は、次第に狭くなつてきた。この先にもつと太いじやり道と合体するのだ。

太朗は頭を冷やす為、文字通り「散歩」をしにきていた。突発的に

彼女を殺してしまったものの、これからどう行動するべきか。まさかこんなことになるとは思いもよらなかつたので、友人達にも坦々気にここに一人きりで来ることを話してしまつていた。だから、彼女の死体が発見されれば真つ先に疑われるのは自分だ。仮に法的に無実になつても周りから白い目で見られることは確実なのだ。

それから、もう一つの問題点。それは云うまでもなく涼香の生死だ。「絶対に死んでいる」と強引に、自分に云い聞かすようにして、別荘を出てきたが……。もし彼女が生きていて、偶然やつて来た塙井に助けでも求められたら……。

そこまで考えて、太朗は小さくかぶりをふつた。深く考え過ぎるな、「もし」を云い続けていたらきりがないぞ、とまた自分に活を入れるよに云い聞かせた。

たひつ……

わたし……は

た

ずっと……

「止めろおー！」

頭の中を、自分の意思と無関係に流れる涼香の言葉を振り払つようにな、太朗は叫んだ。その咆哮は木々の中でこだまし、震わし、消えていった。

三 今朝の殺人

一台の古い型の黒のゴルフが、早朝の高速道路を凄まじい勢いで飛ばしていた。淡い靄がかつた碧空^{へきくう}、光線となつて流れる灰色の景色、切り裂かれる空気、甲高く吠えるエンジン。ゴルフは本来のポテンシャルを無視して、ゆうに一百キロは越していた。

ゴルフの運転席には、車体と同じ黒のポロシャツを着た長身で痩せぎすの、髪の毛をざんばらにしている男の姿があつた。

「……急がなきや」

ジーンズの尻ポケットからは、濃紺の携帯電話が覗いている。それががたがたと揺れる車に翻弄されるように、少しづつ、少しづつ男のポケットから顔を出してきている。そして、ゴルフが前方の大型トラックを抜くべく右車線に移つた、その時。

ボンッ

遂に、男がハンドルを切ると同時に、携帯は左のドアの下に吸い込まれるように落ちて、直にドアに当たつて鈍い音を立てた。

「あつ……」

男はアクセルを緩め、長い手を伸ばして携帯電話を取つた。そして、暫くそれを見つめる。男には、今携帯電話が落ちたことが不吉でしようがなかつた（心を揺さぶられるような、この……）。まだ何も起きていないのに、不安になつてしまつ。

窓から白い業務用のライトバンが左後方に流されていくのが視界に映る。理由のない、不安（……涼香は、一体……）。

やがて男は、何か見えない力に觀念したように、また導かれるようにして、携帯電話を開いた。ディスプレイには、彼女からのメッセージ。

「ごめん、もう耐え切れない。やつぱりもう戻つちゃうね、カジ＝＝

機種の違いで、変換化けしてしまつた無機質な記号を見て、ため息をつく。無事、なのだろうか……。

男　　梶本広志は、濃紺の携帯電話を勢いよく閉じ、ジーンズの尻ポケットに入れた。鹿爪らしい顔をしてちつ、と舌打ちをする。本当なら、最初の一日だけは我慢して、翌日　つまり今日　に告白する筈だつたのだ。そういうことになつていた。なのに　。広志は太朗の、冷静な中に時折見せる短気な一面を知つてゐるからこそ、怖かつた。特に太朗の場合、色事が関わつてくるとそれが顕著に現れてくる。突然の別れ話に太朗が黙つてゐるとは考えにくい。ましてや夜遅くで人気のない場所だ、太朗が何か良からぬ行動にでない訳がないのだ。

（畜生、やつぱりもつと強く云つておけばよかつた……）
ガコン、とシフトを一速分下げる。唸りを上げるエンジン。そのままインターに入った。目的地まで、あと少しだ。

あの塚井という老人と会つてすぐに、太朗は敬二からの着信を受けていた。別荘に忘れ物があつたらしく、正午までにミカエルに届けてほしいとのことだつた。太朗は、生きているか死んでいるかもわからない涼香を別荘に残していくのに少し躊躇いながらも、迷つたあげく愛車のシビックに乗つてミカエルまで届けることにした。別荘まで戻つてきた時、太朗は岬に設置されている白いベンチに座つてうた寝をしている塚井老人を見た。

獣道を抜け、じやり道を抜け、舗装道路を走る。そして、すこし洋風被れした町並みへ。

暫く潮風の吹く明るい海岸沿いを走り、目的地、ミカエルに着いた。イタリアの国旗を模した洒落た看板。流れるような筆記体で、黄色のネオンで「Michaël」と書いてある。硝子張りのドアの側には黒板が立て掛けられていて、丸っこい文字で「本日のお薦め」と書かれている。

シビックを路駐して、太朗が店に入ろうとした時、ポケットの携帯電話が鳴った。

敬二からだ。

『もしもし、太朗か。そろそろ着く頃だよな』

「今着きました」

『おう、そうか。じゃ、すまんけど、脇に入ると裏口があるからそこから入つて、そこに机がある筈だからそこに置いといてくれんか』

「はい」

太朗は携帯電話を耳に当てたまま、首だけ動かす。脇道は、ミカエルと隣の建物との間にあった。

『折角来てもらつたのに、顔も見せられんで悪いな。よかつたら何か奢ろうか』

「いえ、結構です。……涼香もいるんで」

『そつか。じゃあよろしくな』

はい、と云つて電話を切つた。同時にふう、とため息をつく。

正直、下手に顔を合わせたりせずに済んでよかつた、と太朗は思つた。どこからボロが出るかわからない。

幸い一人の人間にも出くわすことなく忘れ物を届け終えると、太朗はシビックに飛び乗つて別荘まで急いだ。海岸沿いを走り、町並みを駆け抜け、舗装道路から外れ、じやり道を走つた。

約二十分掛けて、太朗は普段では考えられない程の猛スピードで別荘へ到着した。じつとりと汗ばんだ手で鍵を掛け、車を降りる。と、

太朗の視界の端に、白い杖を突いた塚井の姿が映つた。太朗が戻つてくるまでの間、ずっとたた寝をしていたのだろうか、塚井は丁度ベンチから立ち上がり、獣道を引き返していくところだった。何故か、どことなくいそいそとしているような歩き方だつた。気のせいだろうか……。

ログハウス調の玄関扉を開ける。太朗は理由もなく微かに震える手で木製の取つ手を回して引いた。清々しい朝の空氣から、屍のいる陰湿な空氣へ。別荘の中は、予想以上の異臭で満ち溢れていた。濃厚な（……しつこく身体に纏わり付く……）、下手をすれば自分もその臭いに溶け込んでしまいそうな、死の臭い（涼香の、屍……）。

頭の中に薄白い靄が掛かっているような浮遊感を覚えながら、扉を後ろ手に閉め、部屋の奥へと進む。

正面奥に見える、薄茶色のカーテン。そこから微かに漏れる外界からの光。レポート用紙の散らばつた勉強机。その少し奥には硝子の小テーブル。どす黒い血痕の付着した銀の灰皿。純白のベッド。

涼香。

ふう、と息を吐く太朗。と、太朗は今見た風景に、何か異常を感じた（何かいびつな……？）。何だ？

カーテン、勉強机、硝子のテーブル、ベッド、涼香。涼香？

あ、と声を漏らした。同時に、太朗の身体は震え始め、止まらなくなってしまった。顔からは血の気が引いていく。そんな、まさか！

ベッドに寄り掛かるようにして崩れ落ちた涼香。その顔は血で塗れていて、……胸には覚えのない包丁が突き刺さつていた。

包丁は、まるで涼香の身体の一部であるかのようにしつかりと突き刺さつている。紅黒い染みのついた血の中心に、包丁の黒い柄の部分が突つ立つている。

「あ……ああ……」

太朗は震える両手を頬に当てた。目の前の現実が、円を描くように

徐々に徐々に捩曲がつっていく。死んでいたはずの涼香は太朗の外出中に、包丁で殺され直されていた。

「そんな、まさか……」

太朗はようよると涼香の死体（もう今度こそ間違いようもなく……）に近づき、包丁の突き刺さつた胸の辺りに触れた。そして、しばし黙考する。

まず第一に、犯人は誰なのか。この別荘周辺には、殆ど人は見当たらなかつた。それに塚井はずつと岬のベンチでうたた寝をしていただろうし、何よりも盲目の人間に人を一人殺害するのは不可能だろう。とすると、犯人は別の誰か？　いや、と太朗は先程の場面を思い返す。太朗が別荘に帰つてきた時の塚井のことだ。彼は入れ違いで戻つていつた時、妙におどおどした感じではなかつたか？　あれは、涼香を殺害した後、ベンチで一息ついている時に自分が帰つてきたからなのではないだろうか？

纏まらない思考に苛立つると同時に太朗は、段々と頭の中に妙にふわふわとした掴みどころのない戦慄感が広がっていくのを感じた。それは多分、涼香の姿が少なくとも一人の人間に見られたからだろう。即ち、自分が「犯罪者」である証を、涼香を殺害した犯人に見られたからである。明らかな撲殺の痕あと。もしかしたら涼香はやはり生き返つていて、全てをばらされたかもしれない。そう考えて、太朗は姿の見えない真犯人に得体のしれない恐怖心を抱くのだった。とりあえず、太朗は塚井に自分の留守中に岬までやつてきた人物を聞き出すことにした。幸い塚井の電話番号はさつき教えられた。太朗はポケットに手を突つ込み、塚井から渡された紙切れを取り出す。粗い紙質の薄つペらいメモ切れだ。

太朗は出来るだけ涼香を見ないようにして、純白のベッドの端に腰掛け携帯電話を手に取り、メモに書かれた番号に掛けた。コール音が何回か鳴つてから電話は繋がつた。

『もしもし、塚井ですが』

電話から聞こえてくる塚井の声は、妙におどおどしていた。少し

焦っているようにも聞こえる。

「どうも、早瀬です。先程はどうも」

『ああ。どうかしましたか』

何か、早くこの会話を終わらせたいとでもいうような、せかせかした感じがする。

やはりこの老人が涼香を？ 実は何かの理由で盲目だと偽つていて、実際には田は見えていた？

「いや 塚井さんが岬にいる間、誰かここへ来ませんでしたか？」

『ここ、というとあの別荘ですか？ 何故そんなことを？』

「どうも、空き巣でも入ったようで別荘の様子がおかしいんですよ。ずっとあそこにいた塚井さんなら何か知っているかなと思って」もちろん嘘だつた。ただ、塚井が何か知つていればいいと思つてのことだつた。

『そう云われますと中々応えにくいですが……。一度、波多江さんはたえが来られましたかな』

「はたえ？ 誰です、それ」

『私と一緒に、毎朝あの岬まで散歩に来る男の方です。確か大学生だと云つておられましたな。今日もあなたが出ていて少ししてから来たようですな。まあ、私は寝ていたので話してもいませんし、何をしていたかも知りませんでしたが』

波多江……。

「 そうですか。わかりました、ありがとうございます」

それから適当に二、三言礼を述べてから、太朗は電話を切つた。これで犯人候補が一人増えたわけだ。塚井が、波多江。

と、それまで静寂に包まれていた部屋の外から、何かの排気音が聞こえてきた。中型くらいの車だろうか。甲高い音を聞く限りでは、かなりのスピードで走つているらしい。その排気音は段々と大きくなつてくる。太朗は戸惑いを隠せずベッドから腰を浮かす。次第にスピードは減速していき、別荘のかなり近くで停まつた。

四 殺人の結末

車のエンジン音はまもなく止み、誰が何をしに来たのだろう、と太朗が戸惑う暇もなく、扉は叩かれた。

コン、コン

扉を叩いた人物は無言だった。それが太朗の不安を搔き立て（誰だ……）、そこから事態は何も進展していないのに心が圧迫されるようになるとどんどん追い詰められていく（誰だ…！）。

「だれ……誰だ！」

殆どがむしゃらに太朗はそう叫んでいた。さつきまで電話で人と会話をしていたとは思えない程、その叫びは野性的であり、冷静さを欠いており、また悲痛でもあった。

自分の背後には、自分が殺害した人間がいる。

扉の前に無言で佇む誰かと、すぐ後ろで事切れている涼香とが、まるで早瀬太朗という存在を両方向から圧迫して押し潰してしまうような錯覚に捕われる。

扉を叩く何者かは、やがて鍵が掛かっていないことを気取り、中へ侵入し、そして部屋に転がっている屍に気付くだろう。ほぼ完全に思考に異常を来してしまった太朗の脳裡のうりには、そんな自分の考えとは全く無関係な映像が鮮明に映り出し始めていた。

何やら異様で巨大な圧力のようなものをたたえた扉を見つめる内に、寒気を感じ始め、同時に熱狂的とも云えるある想いが太朗の心を満たしていった。

扉の向こうにいる人物こそ、涼香を包丁で刺した犯人ではないだろうか。

そうだ、そうに違いない、と太朗は血走った眼で扉の向こうの見えない敵を睨みつけた。敵は、涼香を刺し終え、帰ろうとした矢先に別荘に戻る自分のシビックを目撃し、死体発見を遅らせたい一心で涼香の刺殺体を確実に発見したであらう自分を殺しに来たのだ。そうだ、そうに違いない……。

最早太朗の頭の中は目茶苦茶だつた。大体涼香を殺したのは太朗自身なのだ。それに凶器の包丁は涼香の身体に刺さつたままだ。別荘を去つてすぐにここを訪れたのなら凶器を持っているわけがない。

「コン、コン

敵からの二度目のノック。場を支配していた数秒間の静寂間を破壊し、太朗の心にもその二回のノック音は鋭く響いた。

太朗は何を思つたか、不敵ににやりと笑つた。

「待つていろよ……」

そう云つて太朗は、ごく自然な動作で涼香の身体から包丁を引き抜いた。臍脂色の乾いた血が全体にこびりついていた。包丁を握りしめてひとりひとりと扉に向かつて歩き出す。太朗の不安や恐怖は最高潮に達し、足は小刻みに震えている。そして

力チャリ……

扉が開かれた。僅かな隙間からは早くも朝の健康的な日差しが差し込み、その日差しは太朗の身体に一筋の白い線を作つた。

太朗は素早く扉を開け放ち、目の前に突つ立つていた黒いポロシャツを着た長身の男に向かつて包丁を突き立てた。ぐしゅり、という奇妙な音がした。男　　梶本広志は、驚愕の表情を顔に形作りながら、真後ろに崩れ落ちた。

「は……早瀬、お前……」

太朗は広志を見下しながら、その台詞を聞いてやつとそれが誰だつたかを理解した。

「梶本？ お前、梶本広志か？ まさか、お前が涼香を……」

涼香、と聞いて広志はびくり、と反応した。

「涼香？ 涼香に何かあつたのか？ ……うつ」

上半身を起こしたのが悪かつたのだろう、広志は激痛を感じて悶えた。その憐れな姿を見ている内に太朗の心の中では何故か、広志は犯人ではないのではないか、という想いがじわじわと浸透し始めた。同時に、血走っていた眼は正常に戻り、段々と今自分が何をしてしまつたかを客観的に捉えることが出来るようになつていった。太朗は手短に涼香が何者かによって刺殺されたことを話した。ただし自分が昨夜撲殺してしまつたことは全面的に伏せて、だ。話しを聞き終えた広志は、険しい表情をして、痛みに喘ぎながらもこづ云つた。

「それは、 犯人はお前だろう、早瀬」

時が止まる。全ての動きはその瞬間で固定され、全ての音は止み、その瞬間を境に今まで太朗がもがき苦しんできた世界は瓦解することになる。

「は……な、何を云つてているのか、わからない」

太朗は、全身から力がしゅうしゅうと抜けていくのを感じた。地面にへたりこみ、広志の顔を見る。広志は痛みに耐えながらも、太朗をしつかりと見つめ返していた。

「太朗、……もしかして気付いていないのか？」

「な、何を」

自分の話のどこかに、自分が犯人だと示唆するような発言はあつただろうか。太朗が必死に思い出していると、広志は腕をゆっくりと上げて、太朗をいや、太朗のシャツを指差した。

「そのシャツに付いている血の染みはなんだ。俺には、人を刺した時に浴びる返り血にしか見えないが」

太朗は驚いて自分のシャツを見た。白いシャツに付いた、それは紛れも無い血痕だつた。一体、こんなもののいつから？涼香を殴り殺した後は、確かに記憶はないが、服が変わつてるので自分で着替えたのだろうと思つた。では、血痕はいつ付いたのか？

「……あつ」

太朗は朝からの記憶を辿つて、ようやく答えに気付いた。涼香を刺した時？それしか考えられない。よく考えたら、台所にいる時にあの物音を聞いてから外に出る直前までの間、非常に記憶が曖昧であることに気付いた。ではまさか、涼香は太朗の外出中に刺されたのではなく、太朗の外出前、太朗自身の手によつて殺されたのか？そこまで考えて、太朗はある一つの要素に思い当たつた。包丁だ。太朗がいるかもしれない侵入者に怯え、台所から取り出した包丁。あれは、あの後結局どこへやつた？

「ああ……」

腑抜けたような表情で、投げやりに思った。あの後、あの包丁で自分は涼香を刺したのではないだろうか？そう考へても記憶は依然としてないままだが。

たろう

ごめん

ごめんね

またしても涼香の台詞が太朗の頭の中を満たしていく。太朗はそれを振り払つようゆるゆると首を力無く振ると、更に考えた。動機は？他の者には、死んだ人間に包丁を突き立てる理由なんてあるはずもないが、自分にはある。自分が一度殺害してしまつた人間が、実はまだ生きているかもしない、と思わざるをえない事態になつていたのだ。死んだふりをしているかもしれない涼香に怖くなり、自分の記憶のない間に念押しの意味を持つて刺したのではないだろうか。

そう考へると、外出中に出会つた人間が盲目な塙井一人でよかつた。彼は、目の前にいる人間が、まさか人を刺殺した直後で血まみれで

あるなんて、思いもよらなかつただろう。

「梶本、俺は」

何と言葉を掛ければよいか、模索しながら顔をふつと上げた。

ぐしゅつ

「え……？」

不意に、背中を理不尽な激痛が襲つた。何かを埋め込まれたかのような、えぐられるような痛み。

「か……は……」

首だけを後ろに向けて、そこにいる誰かの姿を見ようとした。そこには、一人の男が仁王立ちしていた。逆光になつて、その姿は見えない。ただの暗い影にしか、太朗の目には映らない。さながら、死神のようでもあつた。

「誰だ……？」

「俺か？ この家にいたお姫様を刺し殺した犯人さ」

男は何でもないことのように、そう云つた。

犯人？ 犯人は、自分ではないのか？ 太朗は混乱した。自分が犯人ではないのか？ 涼香の影に怯え、包丁をその身体に突き刺し、忌まわしい記憶を都合よく消し去つたのではないか？

「う、嘘だ……犯人は、俺だ」

「なあ、俺さ、さつきからの会話をずっと聞いていたんだが。お前、自分が既にあの女の子『りょうか』って云つたっけかを殺していたことを話していなかつただろう。だからこの男がそう推理するのもわかるんだが……」

男は少し躊躇うようなそぶりを見せた後、云つた。

「既に死んでいて死後硬直が始まつていて、血流が完全に止まつている人間を刺して、返り血を浴びるはずがないだろう」

ごめん

ごめんね

ゆるし、て

今度こそ、太朗は力無く地面に横たわった。そうだ、もうあんなに冷たくなってしまった涼香……彼女には、とうに人間の温かさは消えていたのだ。返り血なんて出るわけがなかつたのだ。

ではこのシャツに付いた血は？ これは多分、記憶のない、物音を聞いてからの間に、涼香が生きているかどうかを確かめるために身体に触れたり揺さぶつたりした時に付いたのだろう。 そう考えた瞬間、今までどうにもぴつたりと合わなかつた記憶のかけらが、しつかりと嵌め込まれた。 そうだ、自分は、涼香のことが不安でもあり恐怖でもあり……心配だったのだ。もしかしたらまだ生きているかもしない、そうしたら土下座をしてでも、どんな手を使ってでも涼香に謝るう、と。もし生きていたらまた殺す気全くなんてなかつた、すぐにでも救急車を呼んで、命を守ろうとしたのだ。……でも、どんなに揺さぶつても、どんなに声を掛けても、もう涼香は戻つてこなかつた。動かなかつた。涼香の目は意思を持つて自分を見ることはなく、涼香の口はどんなに酷い罵りでさえも発さなかつた。もう、涼香は、死んでしまつたのだ。 そう気付くまでに、時間は要らなかつた。

「うわああああああああ！」

太朗の目からは涙が次々と流れ落ちていつた。自分が、涼香を、殺してしまつたのだ。今更ながらに太朗はその紛れも無い事実を再認識した。

「畜生！畜生！ううううううう！」

そして今、自分の命もまもなく消えてしまつだらう。あと、梶本広志の命も。この非情な殺人鬼と、そう、太朗自身の手によつて。

「それにしても、この家、あまりにも不衛生だぜ。扉を開けたらまづ出会つたのはでかい蜘蛛だ。机の上を這つていて、鉛筆を落として音を立てるもんだから驚いたぜ」

蜘蛛……音……。

そうだ、自分が聞いた物音は蜘蛛が何かを落としたりでもした拍子

に出た音なのかもしない。薄れゆく意識の中で太朗は思った。
そういうえば、広志の声が聞こえない。気配がない。まさか、
もう事切れてしまったのか。それを確認すべく、太朗は広志の方を
見ようとした。が、その前に、太朗の意識は、終焉の闇に吸い込ま
れていた。……。

「ごめん

…… かじもと

「ごめん

でも、おれ……

また、じぶんでかくにん、できなかつ、……た

しぬほど、くやしいよ……

じぶんで、ころしておいて、……ふたりも……

「ごめん、ごめん、ごめん

と、不意に携帯電話の甲高い着信音が鳴り響いた。男がポケットから携帯電話を取り出して、応答する。

「はい、波多江です。あ、いしまき石巻先輩、……え、これから夜まで部活、
ですか。わかりました、一時間程したらすぐに行きます、はい、……
はい、失礼します」

通話を終える。もう太朗も広志もぴくりとも動かない。男　波多江は暫くすると、隅に隠しておいたジャンパーを羽織り、獸道を引き返していった。朝日がまだまだ眩しい。陽の光を受けて瑞々しさの耐えない岬の地面には、ただ二つの無惨な死体が転がっていた。

四 殺人の結末（後書き）

何かご指摘やご感想などありましたら是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5671d/>

死体殺人の朝

2010年10月12日03時56分発行